

Aブロック全作品と講評

本

www.columnland.net

本は

新たな世界への

招待状である

眼鏡っ娘の魅力について

幼馴染、^(注1)ツンデレ、妹、委員長……昨今のアニメや漫画には、たくさんの属性がある。^(注2)今回は、その中でも筆者の大好きな属性の一つである眼鏡っ娘について説明しようと思う。ここではアニメなどの非実在の世界についてのことを中心に説明するが、これは現実にも応用出来るものであり、そういったものに興味のない方にも是非読んでもらいたい。

まず眼鏡っ娘とはどういうものか。これは簡単だ。眼鏡をかけた女の子が眼鏡っ娘である。常にかけているかどうか、伊達眼鏡かどうかで違いがあったりするが、基本的に眼鏡をかけている瞬間があれば眼鏡っ娘と言って差し支えないだろう。眼鏡っ娘は二種類に大別される。一つは知的なキャラで、もうひとつは逆に知的でない、ドジっ子と称されるキャラである。もちろんこれに当てはまらない場合もあるが、基本的にはこの二種となる。それぞれの萌えポイント^(注3)を解説していこう。

まず、知的な眼鏡っ娘について説明しよう。勉強することにより目が悪くなり、眼鏡をかける。これによって眼鏡が知性を表すことは間違いないだろう。例えば、『化物語』におけるキャラクター、羽川翼はこのタイプに該当する。彼女は一般的な物事ならなんでも知っているというキャラであり、作中ではそこを焦点に話が展開される。しかし、このタイプのキャラの萌えの本質は全く逆のところにある。こういった頭のいい彼女らが想定外の場面に遭遇し、戸惑い慌てる様にこそ我々は萌えを感じるのである。いわゆるギャップ萌えというものは、萌えの原点ではないだろうか。

次に、ドジっ子タイプの眼鏡っ娘について説明しよう。なぜか、眼鏡っ娘の四割くらいはドジっ子である。筆者が思うに、これは眼鏡がないと何も見えず、何も出来ない点がド

ジっ子に繋がるのではなからうか。例えば、『魔法少女まどか☆マギカ』における曉美ほむらがそうである。彼女は幼少期から病床にあり視力も悪く、眼鏡をかけている。後に彼女は眼鏡を外すことになるのだが、それまでは勉強も運動も苦手だった。眼鏡を外す際にはそれらは克服されており、眼鏡がどんくささの象徴として描かれているのだ。このタイプの萌えポイントはドジっ子に共通する。つまり、俺が助けれないといけない、そんな守ってあげたさに萌えを感じるのである。

彼女たちのポイントの一つに、本がある。そもそも視力とは文字を読むことにより悪くなっていくものであり、これは至極当然のことである。例えば『涼宮ハルヒの憂鬱』における長門有希は最初文芸部に所属していたり、『ひだまりスケッチ』における沙英は小説家を志望していたりなど、本と眼鏡の関係は非常に深い。彼女たちの読む本は至って真面目な新書から恋愛小説、漫画まで様々だ。眼鏡っ娘が静かに本を読んでいる姿はピンナップとして使われるほど、大きな萌えポイントの一つとなっている。

もちろん眼鏡っ娘のポイントはここに書いたことだけではない。例えば冒頭で述べた他の属性と複合する場合は魅力がより引き出されるし、逆に普段眼鏡をかけたキャラが眼鏡を外す瞬間も重要な萌え要素である。文面の都合上ここではそれらの説明は省略するのが申し訳ないが、この文章を読んで、少しでも眼鏡をかけた天使の魅力に気付いてもらえたら幸いである。

注1 ツンデレ ツンツンと素っ気ない態度とデレデレと甘える態度を両面に持つキャラ

注2 属性 ここではキャラの性格や個性のこと

注3 萌え 人物や事象への好意の一種であるが、好きとは似て非なるもの。頭でなく

心で感じ取ってください。

本を読む あなたの姿に 一目惚れ

本心を 伝えるべきか いざ迷う

本の中 あなたを全て ヒロインに

本来は 近づくことも 許されぬ

本屋へと 向かう姿を ただ見つめ

本日も 何も起こせぬ 日が終わる

本当に それで良いのか 我に向う

本気出せ お前はそんなに 弱くない

本音など 軽く伝えて しまっただけ

本屋へと 向かう姿に いざ勝負

本能寺 向かう気持ち を 身に沁みて

本陣へ 自分を全て さらけ出し

本望を 成し遂げ我は 力尽く

本日は 本屋へあなたと 共に行く

本のようなストーリーは始まったばかり

大学生活初めの月。俺とはある組織に属することにした。その組織は、年に一度の祭の運営組織だった。組織の規模は大きく、組織内にはいくつかの部署に分かれており、俺は内向的な奴が多い部署に所属した。部署内では特に問題なく、日々を過ごしていた。だが平穩はそう長くは続かなかった。我が部署に難関が立ちはだかった。それは内向的な我々には大きすぎる難関だった。なんと組織全体で自己紹介をしることだった。しかも最後に一発芸をしなければならぬ。ただでさえマンツーマンのコミュニケーションがやつとの我が部署内の人間に大勢の人の前で話せというのだ。これはパラシュート無しでスカイダイビングを無事に行えといっているようなものだ。自己紹介はオーディエンスが野菜だと思っただけか乗り切ってみせよう。だが一発芸なんてものは俺を含め部署内に持ち合わせている者はなかった。そんな絶望の淵に立たされた我々に希望の光が差し込んだ。

「ロシアンルーレットをやろう。六個のシュークリームのうち一個に外見ではわからない程度に大量の本わさびを流し込む。それを食べた者の反応をオーディエンスに提供し、この場を乗り切ろう。」

それはパーティーゲーム用ではないかという疑問が浮かんだが、問題はなかりと満場一致で一発芸はロシアンルーレットに決定した。

当日、ついに我々の番となった。自己紹介を淡々と済ませ、本題の一発芸に入る。軽く一発芸の内容を説明し、全員で一斉にシュークリームを取る。なに、本わさび入りは六個中たったの一個だ。高確率でシュークリームの甘さを堪能するだけで終わるのだ。恐れることはない。そう心のなかで言いつつも手にはシュークリームのほかに汗で満ち溢れていた。

「せーのっ」

一人の掛け声で一斉に口に入れる。そして咀嚼。俺の口にはバニラエッセンスの香りでも支配されていた・・・はずだった。何かがおかしい。脳内アナウンスにはこう出ている。

「フームーな刺激が検知されマシタ。身体に深刻な障害がハッセルしてイマます。直ちに排除してください。」

口に含んだものを吐き出すのは流石にまずいが確かに異常だ。そう考えているうちにも刺激が甘さという至福を侵し、口の中に充満する。そしてようやく味覚が正確な結論を下した。辛い。本わさびだ。アレを引き当ててしまった。大量の本わさびが鼻をつくような刺激を倍増させ、それが激しい頭痛を引き起こした。俺の首から上では地獄絵図の縮図が出来上がっていた。悶え苦しむ中、用意していた水に手を伸ばした。一気に水を流し込み、なんとか生きながらえることが出来た。こうして一発芸は無事に終えた。俺は死にかけたが。

だが今思い返してみても不思議に思っていることがある。あの地獄の最中、俺の舌は一瞬、一度だけ甘みを検知したのだ。激しい頭痛に脳をやられて味覚がおかしくなったのか。だが聞いた話によると、採れたての本わさびには甘みがあるらしい。果たしてあのときの甘みが脳がやられた結果なのか、あるいは本わさびの甘みなのか、はたまた本わさびに侵されることなく生き延びたシュークリームの甘みだったのかは謎である。

本は、人に夢を与えてくれる。

小説がそうであるのは言うまでもない。

どんな夢かは、読む本により、

似ている夢はあっても、同じ夢はほとんどない。

マンガは、絵がある分、

小説よりも自分で想像できる範囲に幅がある。

しかし、やっぱり夢を与えてくれる。

教科書も、ある意味でそうである。

授業中これを枕にする。

厚さがちよほど良ければ快適である。

毎回ではないが、人は夢を見る。

教科書m枕によって、夢を見たと考えれば、

教科書が夢を与えてくれたと言えるだろう。

結論として、本は素晴らしい。

小学校の頃、僕は本の虫だった

授業が終わるとすぐに図書館へ走り、空腹を忘れて児童書を読み漁った

そして、いつも僕の隣にはある女の子がいた

彼女は違う小学校に通っていて、図書館でしか会ったことがなかった
喋ったこともなかった

でもいつも、外が暗くなるまで、彼女はずっと僕の隣にいた

中学生になってゲームとテレビに夢中になった

高校生になって部活と恋に夢中になった

大学生になってサークルとバイトに夢中になった

そして僕はもう社会人

小学校の頃、通っていた図書館が取り壊されると知って記念に訪れた
膝を折り曲げて児童用の窮屈な椅子に座ってみる

いつも座る場所は同じで、いつも隣には女の子がいて……

隣を見遣っても勿論彼女は居ない

その向こう側に大きな窓が見えた

ああ、窓があったなんて知らなかったなあ……

十年も経って彼女の顔も覚えていないことに気付き、思わず口元が緩んだ

窓の向こうに広がる、初めて見る景色が

どうしようもなくいとおしく思えた

秀吉「なに！？織田が本能
寺で明智に集団夜這い口
ウソク自虐プレイで責め
られてイッたって！？俺
も混ぜろハァハァ」

「中国大返し」

『ツンデレラ』

私の名前は紗季。高校一年生よ。趣味は読書。昼休みは毎日図書館で本を読んでいるわ。同級生の子たちはみんな恋の話とかで盛り上がってるけど、何が楽しいのか私にはさっぱりわからない。そんなことよりこうして柔らかな午後の日差しの中、静かに本の世界に浸る時間が何より幸せ。だけどやっぱり絵本の中の王子様みたいな人に憧れる気持ちも少しはあったりする。今日は何の本を読もうかしらと迷っていたとき、本棚の奥にちよつと変わった本を見つけた。『ツンデレラ』……。変なタイトル。だけど私はなぜかその本に惹かれ、窓際の席に座り、本を開く。ツンデレラというのはヒロインの名前らしい。まだページも読んでないのに、窓から差し込む光が気持ちよくて……なんだか眠くなつてきちゃ……った……。

「——デレラ！ ツンデレラ！」

甲高い声で目を覚ます。ここはどこ？ 私は確か図書館にいたはず。それに何、このみずぼらしい服装！

「あなた何掃除をさぼって居眠りしているのかしら？ 早く終わらせておしまい！」

賢い私はすぐに理解したわ。どうやら私、本の世界に入り込んでしまったみたい。この人は多分いじわるな継母。「ナニソレイミワカンナイ！」と言いたいところだけど、入っちゃったんだから仕方ない。ヒロインの大役、私が引き受けるわ！

「それじゃ私たちはお城のパーティーに行つてくるから。あなたはおとなしくお留守番するように。じゃーねー。」

そう言つて、継母と義姉たちは私をおいてパーティーに行っちゃった。私も行きたかつたな！

「パーティーに行きたいって思つとるんやろ？」

「きゃっ！ なっ……何よあなた！」

私の前に突然変な格好をした人が現れた。

「ウチは通りすがりの魔女や。あなたの望み、ウチが叶えたいよか？」

「私は別に……」

「無理せんでもええんよ。ほな行くで。えい！」

「わあ、素敵なおドレス！」

「おまけにブタさんの馬車も貸したげる。あと魔法は十二時解除するからそれまでには戻るんよ。」

「ありがとう、通りすがりの魔女さん。それじゃいつてくるわ。」

こうして私は華麗に社交界にデビューした。紳士淑女の品やかなダンス。豪華な食事。何て私にふさわしいのかしら、何て思っていると突然誰かに声をかけられた。

「ぼくといつしよに踊つてくれませんか？」

世界に二人といないであらう美貌。まっ……まさか、王子様！ そんな、いきなり王子様に誘われるなんて！ うれしいけど、私はあくまで「ツンデレラ」。キヤラを守り通さなきゃ。「だっ、誰があんななんと踊るもんですか！ 気安く声かけないでくれる？ この変態！」

私のバカ！ 絶対嫌われた、と思つたらまだアタックしてくる王子。ここで十二時の鐘が鳴る。もう帰らなきゃ。だけど王子は私を離してくれない。

「だから離してつて言つてるでしょ！」

そう言つて私は王子様の王子様を思いつき蹴り上げた。その場にうずくまる王子。勢いでガラスの靴が脱げちゃったけど、私はとにかくその場から逃げた。

それから数日後、お城の使いの人がガラスの靴を持って各家庭を回っていたの。これって私を探してるつてことよね？ まさかあのときの恨みを……！ ついに私の番が来た。もちろんサイズはピッタリ。終わった……私の人生。と思いきや、「おー！ 王子様、いらつしやいましたー！」

馬車からこちらへ走つてくる王子。

「ここにいたんだね。探したよ。僕はあれから、君のあのすばらしい蹴りが忘れられない。僕と結婚してほしい。」

ぐええ！ 王子様は何かに目覚めたみたい。でも、そこまで言うなら……、

「仕方ないわね。その代わりに、私を世界一幸せなお姫様にしなさいよね。」

「ありがとう、ツンデレラ！」

「かつ、勘違いしないでよね！ 私はただ……」

と言いかけているうちに、突然目の前が真っ白になった。気づくと私はいつもの図書館で寝ていた。何だ、ただの夢か……。だけど、ちよつと楽しかつたわ。素敵なおドレスも着れたし、本の中の王子様にも会えたし……。まるでホントの恋のみたいなおんなの恋を体験した紗季ちゃんなのでした。なんちゃって。

「本」

わたしだって、若いころはチャホヤされたのよ。昔なんて、みんなのハートはわたしのものだったわ。

それが何よ何よう、気づいたらみんな、絵ばっかりのアイツに夢中になっていたじゃない。

たしかに、あの魅力的なコマ割りはかわいいわ。しかも、一週間おきに新しい顔になっていたら飽きもしないわ。

でも、わたしみたいに教養がないわ。みんな早くわたしの魅力に気づいてよ。

まあマンガはまだいいわ。一応、わたしの遠い親戚ですからね。でも、アイツは別よ。

最近の若いコたちはみんなアイツにイカれてるわ。

アイツはピコピコうるさいだけじゃない。

たしかに、メイクの腕は上げたわ。顔の線がくつきり見えるようになったわ。

最近では、アイツの攻略のためにみんな、わたしまで利用するようになってきたわ。

ふざけるんじゃないわよ。アイツの何がいいのよ。ちょっと偵察してくるわ。

あらやだ……。いいじゃない。

箱の中で自分の思い通りに世界が動くわ。

お姫様を助けて英雄になったり、かわいい動物をペットにして戦わせたり、プロ野球選手になったり……。おまけに、ついに、ついに、恋人も出来てしまったわ！！

わたし、あなた、ゲームのことを誤解してたわ。悪く言ったりして、ごめんなさい。

そ、それより、はやく新作見せてくれないかしら？

(こうして「本」は時代の流れに飲み込まれていった…。)

あなたを想うこの気持ち

それはわたしの心の底に

あなたを想うこの気持ち

それは言葉に形を変えて

あなたを想うこの気持ち

それはひとつの本となり

あなたを想うこの気持ち

それはだれかの心の底に

『絵本のお兄ちゃん』

「ねえ、君。一人で遊んでるの？」

小学校二年生の初夏のこと。親が共働きで近所に友達もいなかった私は、放課後はいつも家の近くの公園で一人で遊んでいた。あの日、隣の空いたブランコの上、一人遊びにも飽きてもう帰ろうかなと迷っていた私に声をかけたのがお兄ちゃんだった。

「君、よくここに一人でいるけど、良かったら、お兄ちゃんと一緒に絵本読まない？」

見上げた優しい口元に私は頷いた。

「じゃあベンチで読もうか。君の名前は？」

「……ゆり。あらいゆり」

「ゆりちゃんか、素敵な名前だね」

これが私とお兄ちゃんの出会いだった。

「この絵本、ゆりちゃんにあげるよ」

五時の鐘が鳴って別れ際、お兄ちゃんは私に絵本を差し出して微笑みながら言った。

「え、いいの？」

私は嬉しさを隠せない顔をしていただろう。小さかった両手でそれを受け取った。

「いいよ。でも、一つお願いがあるんだ」

「なあに？」

「お兄ちゃんのところは誰にも、お母さんにもナイショにしてくれないかな。できる？」

私は勢い良く、上半身を全部使って頷いた。

お兄ちゃんは優しく頭を撫でてくれた。

「ゆりちゃんの髪はサラサラだね」

そう言ってお兄ちゃんは目を細めた。

両手で抱きかかえるようにして持ち帰った絵本を私は机の引き出しの一番奥にしまった。

誰にもナイショ。秘密にドキドキしていた。

それから毎週、お兄ちゃんに時間のある水曜日の放課後は二人で遊んだ。お兄ちゃんは大学生で最近引越してきたのだと言った。

自分について教えてくれたのはそれだけで、いつも私が話す方だった。家でのこと、学校

でのこと。何でも楽しそうに聴いてくれて、それが嬉しかった。ブランコを押してくれて、

お菓子も買ってくれた。お兄ちゃんは本当に

優しく、私は大好きになった。

「ゆり、もっとお兄ちゃんと遊びたいな」

出会って一年経った頃、私が言うと、お兄ちゃんは困ったような顔で笑った。そして、

会う日は増やせないけど、と少し悩む表情を見せた後にこう言った。

「じゃあ、さ。今度、うちに来て遊ぼうか」

お兄ちゃんの家にはゲームやマンガが沢山あった。目を輝かす私の前にお兄ちゃんはおもむろに紙袋を差し出した。中を覗くとフリフリの服やマンガの女の子みたいな服が入っていた。可愛い！と私は声を上げた。

「これ、ゆりが着てもいいの？」

お兄ちゃんは目線を合わせず頷いた。

「可愛いよ。写真、撮ってあげるね」

何だか恥ずかしくて、でも、可愛い服で言われるままにポーズをとるのはモデルになった気分であつたのを覚えている。

その日から度々お兄ちゃんの家で遊んだ。

膝の上でマンガを読ませてもらい、ゲームを教わった。そして色々な可愛い服を着て、また写真を撮った。お兄ちゃんは繰り返し返した。

「お兄ちゃんとのことは秘密だからね」

楽しい時間だったけれど、学年が上がるにつれ私もお兄ちゃんもお互いに忙しくなつて毎週は会えなくなつていった。それでも五年生の頃までは月に一回は会えていたのが、六年生では二三ヶ月に一度になった。予定が合わないのではなく、お兄ちゃんが私を避け始めていた。私は淋しかったけれど、大好きなお兄ちゃんを困らせたくはなくて我慢した。

結局、最後に会ったのはその十月だった。中学からの帰り道、あの公園とは別の小さな公園がある。その日、私は見てしまった。お兄ちゃんが小学生の女の子と絵本を読んでいるのを。私は踵を返して駆け出した。意識の端で既に感じていた疑惑が、不安が、現実となつて私を貫いた。目元が熱い。胸が痛い。

どうして時間は流れるの。どうして私はお兄ちゃんの好きな私のままでいられないの。

悲しくて、悔しくて、虚しい。ああ、なんて惨めで無様な失恋なんだろう。

遠回りで帰宅して、引き出しからあの絵本を引っ張り出した。折り曲げて、ビリビリに破いてしまいたかつた。でも、手が動かない。

かわりに絵本をぎゅっと抱きしめる。以前は腕に余つたそれも、今や胸にすっぽりとおさまつて、その現実に涙が溢れた。

泣きながら開いた

人生の本を

笑いながら閉めよう。

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
A01	無題 (招待状)	3 pt	11 位	0 sp
		まじょコメント さりげないフレーズなのですが、明朝体でかっちり構成したことで、「招待状」というキーワードがくっきり印象づけられます。まさに表紙のための作品でした。		
A02	眼鏡っ娘の魅力について	6 pt	7 位	2 sp
		素材はネタでも、考察はきっちり王道な正統派、入ります。 長い作品が多い今週、これを入れるか最後まで悩んだT A陣ですが、しっかりした正統派をみなさまにぜひ読んでほしくてむりやりねじこみました。 事例の上げかた、論理の構築。池上先生の単位取得を目指されているかたがたは、ぜひ参考にしてください。 作者バレ、そりゃするわな。 特別賞：ツンデレ賞 (キュんとした☆) どうせ書いたの wing(ゝω・)vキヤビ さんで賞 (それっぽかったから)		
A03	本のようなストーリーは始まったばかり	8 pt	3 位	4 sp
		技巧派です。すべてを本で始めて、リズムも整え、しかもストーリーも順調に進行する。超絶技巧派と言って良いかもな逸品です。 本能寺、で悲劇を予感したのですが、ハッピーエンドで良かったあ。技巧がしっかり評価されて最多特別賞&ブロンズメダルです、おめでとう!! 特別賞：ほん賞 (本を色んな形で使ってストーリーにしている。) よく16回も出したで賞 (「本」が16回もでてきたから。) 松尾芭賞 (五・七・五より) 攻撃力高い賞 (本ネタをふんだんに使ってるから。)		
A04	本わさびは用法・用量を守り正しくお使いください	6 pt	7 位	0 sp
		じつい、おそろべし。 わさびシュークリームを口にするくだりの、こまやかな描写が光ります。辛 (から) くて辛 (つら) い経験、ここで使えたからOKということ。 ときに、はたしてわさびに甘みはあるのでしょうか？ 理系学生だったら、試してみたくなるよね (煽り)		
A05	無題 (本は人に夢を)	3 pt	11 位	0 sp
		マジメに展開していると見せかけて、するりとマクラにシフトというとぼけ味がユーモラスでした。 レイアウトをがんばると、もっと見栄えがします。 イチオシフレーズ：「教科書m枕」×2		
A06	僕と彼女と	7 pt	5 位	1 sp
		思い出のなかの女の子。思わぬ再会！みたいなドラマは何も起きないのですが、それが日常だよな。自然体の描		

		写◎。 特別賞：口元が緩んだで賞（口元が緩むんだな。）
A07	中国大返し	7 pt 5 位 4 sp 大河ドラマの影響か？ これをシールでぶちこんできた勇氣は、まさに戦国武将級。未永くネット上に保存されますので、あなたの黒歴史にしてください。 話題集中で最多特別賞です、おめでとう！ 特別賞：本能寺の変態で賞（「本能寺の変態」というタイトルだともっと良かったのではないか）戦国武賞（きもい！）誤爆したで賞（きもい。班の女子がTAにマジギレしました。）文字大きいで賞（フォントのサイズが大きかった。） イチオシフレーズ：「俺も混ぜろハアハア」×4
A08	ツンデレラ	8 pt 3 位 3 sp キャラ、セオリー通りにしっかり立ってますねえ。 王子様の王子様ってなんじゃいな、などキワドいラインを攻めて楽しませていただきました。 ツンデレ好きの読み手さんたちにヒットし、ブロンズメダル&イチオシフレーズ大賞ゲットです、おめでとう!! 特別賞：金曜ロング賞（長いから。）パロディ賞（面白く読めました）ツンデレで賞（4位にランクインしたから） イチオシフレーズ：「君のあのすばらしい蹴りが忘れられない。」「ナニソレイミワカンナイ！」「ブタさんの馬車」「王子様の王子様を思いっきり蹴り上げた」「ツンデレラ」
A09	本（あややだ、いいじゃない）	5 pt 10 位 0 sp もし本が、ゲームのとりこになってしまったら。 本の自己主張で終わるかと思いきや、あら、いいじゃないとあっさり改心しちゃう柔軟さが意表を衝いておもしろかったです。 イチオシフレーズ：「こうして「本」は時代の流れに飲み込まれていった…。」
A10	無題（あなたを想うこの気持ち）	6 pt 7 位 1 sp あふれる想いが形をなして一冊の本になり、それが世に流れ出て、だれかの心の渚に打ち寄せる。 本をハブとしたネットワークの構造がくっきり見えてくるような選び抜かれたフレーズたちでした。 特別賞：健闘賞（テンポがいい）
A11	絵本のお兄ちゃん	15 pt 2 位 0 sp ろりこんお兄ちゃんのアブナイ水曜午後。ソフトな描写で危険水域を回避しつつ、この作者さんならではのこまやかな心情描写に引き込まれます。シリアス設定が多かった（気がする）今までと少し変わってユーモアが加わりましたね。おめでとうシルバーメダル!! ときにお兄ちゃん、いつまで大学生やってるの？ イチオシフレーズ：「お兄ちゃんとのことは秘密だからね」「ゆりちゃんの髪はサラサラだね」
	無題（泣きながら	16 pt 1 位 0 sp おおとナットク。ちょっとしみじみ。 留学生さんのナイスアイデアで今週のしめくりで

A12	開いた人生の本を)	す。僅差の争いを制して首位に輝きました。おめでとう 壇上ゴールドメダル!!! イチオシフレーズ：「泣きながら開いた人生の本を笑いながら閉めよう」
-----	-----------	--

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
B01	それなりにやる気があった入学当初に買った教科書達	13 pt	2 位	4 sp
		<p>まじょコメント</p> <p>たしかにね。あれもこれもと売り付けられた感、あるかもね。まあ、捨てずに置いとけば、いつか役に立つでしょう。後輩にあげるとか。 でなくても著者と出版社（と生協）への寄付と考えれば……だめ？ 共感力マックスで、シルバーメダル&最多特別賞ゲットです、おめでとう!!! 特別賞：ゆうてワンチャンあるっ賞（TOEICゆうてワンチャンあるっしょ（ない）それはお前だけで賞（お前だけだから）もったいないで賞（教科書ぐらいは開け）テスト期間だし勉強しま賞（テスト期間だから） イチオシフレーズ：「開いてすらない」×3</p>		
B02	本当の目的	9 pt	5 位	2 sp
		<p>ほおほお、運命の出会いをされたのですね。先方からアプローチしてくてるなんて、手間が省けて良かったじゃないですかー（棒）。 「俺」のニヤニヤ顔が愕然となるラストを想像して、読者がニヤニヤできます。シンプルだけど、落としかたのセンス秀逸。 特別賞：ホモ賞（やっぱりホモじゃないか！）「（「^o^）」賞（客がホモオだから） イチオシフレーズ：「そこには電話番号と……メモが挟まっていた」</p>		
B03	ちゃんと元の場所に！	2 pt	9 位	1 sp
		<p>あるよねー。つい手を出して直したくなります。日常感、さっくりすくいあげていただきました。 特別賞：アルアルで賞（最も日常でありえそう・・・） イチオシフレーズ：「1 2 4 3」</p>		
B04	いたいけな青年一本釣り	3 pt	7 位	1 sp
		<p>これ、かわいそすぎなシチュエーションなんですけど。まるっきりイジメなんですけど。いいのかわ？ それとも、こうやって、いたいけな青年は新たな人生の扉を開くという成長ストーリーだったのか……なあるほど。 一本釣りに「本」を使ったユニークさ◎。 特別賞：ドッキリ賞（愛のないドッキリだ）</p>		
B05	チャタテムシ	1 pt	11 位	0 sp
		<p>どやあ、という虫くんの顔が見えるような、豆知識一行コラムでした。 へえ、そんな虫いるんだと検索してた班もありました</p>		

		よ。さくっとイチオシフレーズ大賞です、おめでとう！ イチオシフレーズ：「本の虫」×2 「チャタテムシ」×2
B06	どうぞ召し上がれ！	6 pt 6 位 3 sp さらっと読むとフツー。 じっくり読むとホラー。 どちらでも、お客様のお好み次第。策士だなあ。この傑出した発想力にブラボー！ 特別賞：おいしく食べま賞（班員の印象に残る内容だった。意味が分かった時おもしろかった。）おいしいで賞（ボケが深いから）ブラックで賞（ブラックなところをうまく隠してて面白い。） イチオシフレーズ：「おふくろの味」×2 「本場のインド人」
B07	無題（漫画って）	0 pt 12 位 1 sp 一章で止まっているんなら、B1さんよりは進歩してますね。うん。参考書はじっくり読む分、それだけコストパフォーマンスが良いともれます。 特別賞：一賞（一章だから）
B08	攻略本を手した勇者	29 pt 1 位 1 sp 魔王vs勇者。日ごろなじんだ世界を別アングルから見ることの楽しさを満喫させてくれます。 世界の全てが分かってしまったら、人生おもしろくも何ともないよね。そんな深い寓意まで伝わってくるような。 圧勝でしたね。先週の事故（シール貼り忘れ）からの歴史に残る大リベンジでした。良かった良かった。おめでとう壇上ゴールドメダル!!! 特別賞：時代遅れで賞（ネットでなくあえて本なところに） イチオシフレーズ：「私に至っては今でもタンバリンを叩き続けている。」×2 「お前の体力は2万だ」
B09	本棚	3 pt 7 位 1 sp 古本じいさん、たったひとことでいい味出してますねえ。 年輪を重ねたからこそ、価値も存在感も加わるのさ。人間も同じだよ。そんなふうに深読みしてみました。 特別賞：冷暗賞（惜しくも3位ならず！暗いところに置こう）
B10	絵本の宿命	2 pt 9 位 0 sp 捨てられてしまう絵本のさびしさ。 「指を傷つける」という伏線もうまく入って、しっとりテイストでまとまりました。
B11	無題（日記を閉じた）	11 pt 3 位 0 sp 長い人生のなかでの、いろんな本とのつきあい。 ラストですうっとカメラを引き、人生全体を「日記」という本に見立てた見晴らしの良さがこちよいい。 おめでとうブロンズメダル！
		11 pt 3 位 1 sp 眠りに落ちる前のひとときって、一日でいちばん心おだやかな時間なのでは。

B12	無題（ふわふわの布団に）	その時間を冒険の本とともに。まさに至福のひとときを、それにふさわしい夢見心地のフレーズたちで形づくっていただきました。 共感を誘ってブロンズメダルです、おめでとう！ 特別賞：すてきで賞（リズムがいい）
-----	--------------	--